

2026 年秋季大会(オンライン)国際シンポジウム要旨

東アジアからひらく世論研究の新たな地平

報告者：アダム・ブロンソン氏（英ダラム大学）

討論者：比護遥氏（金沢大学）

討論者：稲増一憲氏（東京大学）

司会者：千葉悠志氏（京都産業大学）

（企画：国際委員会）

概要

近年、日本における世論研究は、調査データを用いた実証分析だけでなく、歴史社会学やメディア史、理論研究、概念史などの多様なアプローチを通じて豊かな成果を蓄積してきた。では、こうした研究蓄積を踏まえ、世論をめぐる研究は今後どのような方向へ展開していくのだろうか。また、その射程は日本を越えてどのように広がりうるのだろうか。本シンポジウムでは、世論をめぐるこれまでの研究成果を踏まえながら、「世論」や「世論調査」という制度や実践が、いかなる歴史的・社会的条件のもとで形成されてきたのかを国際的な視野から再考する。あわせて、日本を中心に蓄積されてきた知見が、東アジアやグローバルな文脈との対話を通じてどのように再定位され、新たな研究課題や比較研究の可能性を切り拓きうるのかを検討したい。

報告者のアダム・ブロンソン氏（英ダラム大学）は、日本近現代史、とりわけ日本の思想史や政治文化史を専門とする研究者である。近年は、世論や世論調査をめぐる概念や実践の歴史的形成を比較史的観点から検討し、日本の世論史研究を国際的な研究潮流のなかに位置づけ直す試みに取り組んでいる。本シンポジウムでは、氏の最新の研究成果と問題関心を共有するとともに、二名の討論者との議論を通じて、日本における世論研究の今後の展開可能性と、その知見が東アジアおよびグローバルな研究文脈といかに接続しうるのかを考える機会としたい。

アダム・ブロンソン氏の報告内容

題目：私選投票・請願用紙・自己調査：出版メディアと世論調査の前史を考える、1885-1927

要旨：本報告は、世論調査が成立する以前、人びとがどのように社会的・政治的課題について意見を表明し、その意見が集約されてきたのかを歴史的に考察するものである。とくに世論理解が質的なものから量的なものへと転換していく過程を、「公」（公・輿・世）ではなく「論」（論・意見・思い）さらには「意見を持つこと」そのものに着目しながら捉え直すことを試みる。そのため、本報告では出版メディアに媒介された私選投票、請願、統

計調査という三つの事例を取り上げる。「意見を数え集める」各種のメディア技術が「意見を持つこと」を、どのように促し、どのように捉えてきたかを考察することによって、世論調査を、既存の世論を測定する技術としてではなく、「意見を持つ公衆」を形成する実践としての歴史的意義を示唆する。

登壇者プロフィール

報告者：アダム・ブロンソン氏

英ダラム大学歴史学部准教授。専門は日本近現代史・思想史・政治文化史であり、思想や知識の国際的な流通と、それが日本社会においてどのように受容・変容されたのかを研究している。近年は世論と世論調査の歴史に関心を広げ、世論形成や数量化の過程を比較史的な視点から検討している。主要著作に *One Hundred Million Philosophers: Science of Thought and the Culture of Democracy in Postwar Japan* (University of Hawai'i Press, 2016) があり、近年は世論調査と民主主義の関係を論じる研究成果を発表している。

討論者：比護遥氏

金沢大学国際基幹教育院講師。専門は、中国・台湾近現代史およびメディア史。主著『近現代中国と読書の政治』（東京大学出版会、2024 年）があり、また「戒厳令期台湾における世論調査史-中華国民意測驗協会を中心に-」（『メディア研究』108 号、2026 年）で、第 12 回日本メディア学会優秀論文賞受賞。

討論者：稲増一憲氏

東京大学大学院人文社会系研究科准教授。専門は、社会心理学・政治心理学・世論研究。主著に『マスメディアとは何か-「影響力」の正体-』（中公新書、2022 年）、『政治を語るフレーム-乖離する有権者、政治家、メディア-』（東京大学出版会、2015 年）がある。